

平塚らいてうが見た近代の宗教とその評価

モール・ミシエル

はじめに

このテーマを選んだ主な理由は次の四点に絞られる。⁽¹⁾最初の動機は平塚らいてうの自伝を近代宗教に関する証言として扱うことである。次にこの証言を読んでいる内に、それが仏教教団の史料を相対化するのに役立つという認識が生まれた。そして従来の平塚らいてう研究が、彼女の宗教的な側面を「神秘」として片付け、軽視しがちだと気付いた時に、幾分かこれを再検討する必要性が浮上した。さらに近代思想史を見つめ直すにも、平塚らいてうの宗教観が効を奏するに違いないという確信があったからである。

本稿では平塚らいてうの様々な宗教との出会い、そして彼女によるそれらの宗教に対する評価に焦点を当てた。ここでいう「評価」とは本人がどのように見て、どのように感じたかを語る文章、またはその行間から汲み取れる内容を指している。当然ながら、このような価値観に関わる次元を浮き彫りにする場合、原著者の発言を鵜呑みにしたり、そこに余分な意図を投影したりする危険性への警戒は欠かせない。筆者の宗教思想史研究の立場から、図らずもその

ような曲解が生じたとすれば、叱正を乞う。

背景としての家庭環境

平塚明⁽²⁾（一八八六―一九七二）の生涯を考える時、生まれ育った家庭をも視野に入れる必要がある。これに関しては米田佐代子の緻密な研究成果があるので深入りしないが、この家庭には宗教に対する特別な関心があったと言える。若い頃の平塚明の宗教渴望を刺激した要因を彼女の内面以外に求めるなら、むしろ父との葛藤が挙げられる。父の平塚定二郎（一八五九―一九四二）⁽³⁾は明治憲法の作成にも携わった役人であった。ところが彼は、娘の文章を通じて推測し得るかぎり、維新の矛盾を体現していたようである。つまり上から押しつけられた、いわゆる「近代化」を最初に鹿鳴館のような疑似の欧米化という形で受容し、そして政治の風向きが変わるにつれ、ナショナリズムに共鳴するようになったことが『自伝』から窺える。⁽⁴⁾

ここで注目したいことは、平塚らいてうの宗教的探究のピークが父親との葛藤の期間（一九〇二―一九一四年）とほぼ一致することである。したがって、本稿の範囲も自然にこの期間と重なる部分が大きい。他方では、平塚らいてうが影響を受けた女性として、母の光沢⁽⁵⁾（旧姓は飯島、一八六三―一九五四）⁽⁶⁾、姉の孝⁽⁷⁾（一八八五―一九六二）、姉の乳母のキヨ、そして特に祖母の八重（定二郎の母）の存在が目立つ。八重に関して「祖母が熱中していたのが「陶宮術」と呼ばれる一種の人生判断術のようなものであった」と記されている。これは横山丸三（春亀斎、一七八〇―一八五四）が唱えていた占い方法で、主に生年月日と人相によって人の性質を描く。正確にはこの方法は単なる占いに止まらず、開運のために「気質変化の修行」⁽⁸⁾を勧めていた。平塚らいてうの「祖母は、わたくしが幼時もっとも親しんだ人であり、したがって、一番とはいえないまでも、かなりの影響をうけた人でした」（『自伝』①二七頁）という記述を見ると、八重の精神的な世界との接触が宗教への関心を促した可能性が高い。

平塚らいてうは一八九八年に東京女子高等師範学校付属高等女学校（お茶の水）に入学してから、読書などを通して益々宗教や哲学に関心を示すようになり、宗教を説く人の肉声まで聞きたいと願うようになった。例えば卒業する十七歳のとき、

「五年生のころ、クラスで隣りの席に、当時仏教学者として名高かった、村上專精博士の娘さんがいました。……新聞かなにかでこの村上さんのお父さんの講演があることを知ったわたくしは、村上さんのお父さんということもあって、その講演会に行ってみる気になりました。……」会場は神田の錦輝館でしたが、それは法然上人が親鸞上人の、何百年祭かの記念講演会でした。これが仏教の話聞いた最初の機会でした（『自伝』①一五〇頁）。

この講演が一九〇三年に行われた時、村上專精（一八五一―一九二九）は東京大学の講師として活躍するかわら、『佛教一貫論』（二八九〇年）で評判が高まってから、『佛教統一論』の第一編「大綱論」（一九〇一年）と第二編「原理論」（一九〇三年）を著したばかりで、次々と発行される著書が波紋を広げていた。村上が「大綱論」で主張した「大乘非仏説論」は特に問題になっていたが、平塚らいてうは自分の存在に対する疑問に没頭して、この議論に関心がなかったであろう。一方で村上が女性教育へ期待を寄せていたことは『日本佛教の女子に對する態度の變遷』という講演の記録（一九〇四年）と『女子教育管見』（一九〇五年）から、そして一九〇五年に東洋高等女学校を創立したことから明らかである。しかし、実は村上の女性像は次のようなものであった。

「女子は男子よりも淫祠迷信に陥り易き性質を有して居る。男子といへども淫祠迷信に陥り易きは、一般人生の弱点であるが、女子は概して智力的判断力に乏しい、推理的理想が少ない、そこで淫祠迷信に陥る者は男子よりも女子の方に多数を占むるやうである」『女子教育管見』一七六頁。

一 キリスト教との出会い

平塚らいてうが村上の講演のなかで同様の発言を聞いたかは定かではないが、その後同じ年に日本女子大学に入学する。この大学に入った切っ掛けは成瀬仁蔵（一八五八―一九一九）がアメリカでの留学を終えて一八八六年に『女子教育』を著し、一九〇一年にこの大学を創立したことである。彼女は『女子教育』を読んで、開校まもないころ、父親の反対を押し切って念願の入学を果たす。当初には感激が溢れ、「成瀬先生を、わたくしは生まれてからはじめて崇拜する人物として仰ぎ見た」という述懐があるほどであった（『自伝』①一五九頁）。成瀬の熱烈な雄弁を聴く機会が多かった平塚らいてうは実践倫理という授業を次のように描いている。

「成瀬先生は、御自身が若くして敬虔なキリスト者であり、牧師の聖職にも長くついていた方でありながら、（……）実践倫理でキリスト教を説くようなことはありませんでした。それどころか、むしろ、憎しみを帯びた強い口調で、既成宗教としてのキリスト教の独断や偏見を非難して、感情的な婦人が、現在あるところの教会や教団のなかに、安易な信仰を求めようとする態度のあやまりを戒めるのでした」『自伝』①一五九―一六〇頁。

平塚らいてうがこのような成瀬の批判的な精神に魅了されたのは当然であろう。しかし、やがて成長するにつれ、教師の雄弁さに対する受け止め方が変わっていく。彼女は、自分の心の変化を次のように自覚するようになった。

「わたくしはやがて、成瀬先生の講義そのものに対しても、いままでのように打ちこめなくなってきたのです。それはまるで、酔いが自然とさめるような気持ちとでもいったらいでしょうか。成瀬先生の手を挙げ、拳を固め血をしほするような全人的な講演は、聴いている瞬間は、若い魂を深い感激の渦中に巻きこみますが、教室で懸命にノートしてきたものを、あとで読み返してみると、不思議に火の消えたあとの炉にあたっているような、白々しい、冷

たいものに、多くの場合変わってしまったのでした。つまり成瀬校長の生きた人格から離れたこれらの思想、文字は、もはや魅力なく死物化しているのです」『自伝』①一七三頁。

この文章では直接の「批判」を避けるものの、「白々しい」という表現を使っている。この興ざめを「はっきりと偽りと分かる様子」という意味に取るなら、平塚らいてうの感受性が鋭くなり、成瀬に対する評価が極めて厳しくなったことが読み取れる。

自己探究の深まり

平塚らいてうは高い理想を抱いていただけに、一種の失望を覚えたに違いない。しかし、これはちょうど自分のアイデンティティを真剣に考えるようになった証でもあった。

「神とはなにか、我れとはなにか、真理とはなにか、人はいかに生きるべきか」というような問題の追究に、休みなく駆り立てられているように思ったものでした（……）『自伝』①一七八頁。

自分の存在の根源を死に物狂いのように求める中、連日朝から晩まで図書館で過ごし、本を貪るように読破していた。必死で「何か」を探したすえに、彼女はヒントを与える文章に出会う。

網島梁川によるひらめき

「明治三十八（一九〇五）年春、世間ではバルチック艦隊来るとさわがれているころ、わたくしの心（内的生活）によりやく大きな転機のおとずれる日がやってきました。それは、かねてから愛読していた網島梁川の発表した「予が見神の実験」という告白文を読んでうけた深い感動と暗示がきっかけとなったものでした」『自伝』①一九〇頁。

網島梁川（一八七三―一九〇七）に関して、平塚らいてうは日本女子大学の図書館でその文章に親しんでいた。網島は

『早稲田文学』という雑誌の編集にも携わっていた人物で、牧師の海老名弾正（一八五六―一九三七）などの影響を受けている。この一九〇五年に発表された「予が見神の実験」という原稿は、海老名が創立した『新人』という雑誌に掲載され、特に若い人の間に大きな反響を呼んだらしい。網島は二三歳の時から結核に罹り、この文章を発表した二年後に亡くなる。平塚らいてうは網島の告白に感動し、より具体的な形でその境地に接近する方法を探っていた。

「深く内部生活に沈潜する」とか、「至情の要求に神の声を聴く」とかいても、それは一体どうしたらできることなのか、わたくしには皆目わかりません」『自伝』①一九二頁。

二 禅との出会い

このように自己探求に悩んでいる最中、平塚らいてうは木村政（一八八五―一八五八）⁽¹²⁾という同級生の部屋で重要な手掛かりを見つける。机には円覚寺の洪川宗温（一八一六―一八九二）⁽¹³⁾が書いた『禪海一瀾』という著書が置いてあったのである。和装本のページをめくると「大道を外に求めてはいけない、心に求めよ」という言葉が目にとまった（『自伝』①一九三頁）。これを「観念の世界の彷徨に息づまりそうになっている、現在の自分に対する、直接警告のことば」と受け止めた平塚らいてうは、修行が不可欠だということに気づく（『自伝』①一九三頁）。この結果、洪川の孫弟子、輟翁宗活（一八七〇―一九五四）⁽¹⁴⁾の指導を受けるため、日暮里の両忘庵に通いはじめる（『自伝』①一九四頁）。ちなみに「両忘」という庵の名前は「迷いと悟りの区別を忘れる」ことを暗示している。

解放と試練

一九〇六年には、平塚らいてうは日本女子大学を卒業して、自分の両親にも相談せず津田梅子（一八六四―一九一九）

が率いる女子英学塾で語学の勉強に励んでいた。その頃、毎朝欠かさず参禅^⑬に通っている。同年の夏、最初に与えられた公案を透って「見性を許された」(『自伝』①二〇頁)。ちょうど二月に二〇歳になったばかりのこの時期は、平塚らいてうにとって、さまざまな体験や試練が待ちうける青春期の頂点にも該当する。

まず、同年の九月に頼翁宗活が数人の弟子を連れて布教のためアメリカへ旅立つことを知らされる。師匠から離れることを余儀なくされた平塚らいてうは「大きな打撃」を受けたことを隠せない(『自伝』①二二頁)。くれぐれも「留守中、他の師家につくなど戒められ」たにも関わらず、らいてうは間もなく宗詮眞浄^⑭(一八四二―一九一四)の説法を聞いて、この「紳^⑮のような顔をした老僧の渋い人柄に惹かれ」、その下で参禅を再開することを決める(『自伝』①二二頁)。参禅する場所は海禅寺という現在も上野駅の東の合羽橋にある寺院で、そこで一ツ橋の東京工商(一橋大学の前身)の学生が「如意団」という坐禅会を設けていた。宗詮眞浄を招き、この寺で接心を開催するたびに平塚らいてうは「毎月かならず参加し、参禅を怠るようなことはありませんでした」と語っている(『自伝』①三三四頁)。

異性への視線

平塚らいてうが修行に情熱を傾注する時期は、また性をめぐる「実験」を重ねる時期でもある。男性との関わりを含む出来事は平塚らいてうの研究では必ず注目されているので詳細を省略するが、海禅寺の住職を務める中原秀嶽^⑯(一九二八年没)との関係、そして特に森田草平(一八八一―一九四九)との交際と家出が大スキャンダルとして新聞で報道されるようになる。平塚家に大変な屈辱が及び、父の定二郎に「辞職を勧告する人」が出る騒ぎまで発展した。

新聞記者のやかましい取材を避ける意味もあって、平塚らいてうはしばらく「鎌倉円覚寺境内の小さな一軒家を借り」て、「打坐(坐禅)し続け」る事を決める。当時(一九〇八年)、円覚寺派の管長を務めていたのは函應宗海^⑰(一八五六―一九二三)という老師であった。ところが、平塚らいてうの目から見ると、この師は「まるで魅力がなく(……)参

禅する気になれ」ない人物のように映った(『自伝』①二七四頁)。

南天棒の指導

平塚らいてうが鎌倉、そして信州での隠遁生活を終えたのは一九〇八年の十二月で、その時点でようやく東京に戻れた。帰った直後、在家の医者が建てた神田の日本禅学堂に毎月、南天棒というあだ名で知られる鄧州全忠^⑱(一八三九―一九二五)が来て、接心が行われると聞き、再び参禅に没頭する。しかし、いくら努力しても埒が明かないため、翌年の十二月には南天棒の西宮の海清寺まで行って、臘八接心という極めて厳しい一週間の修行への参加を決心する。その間、「無」という公案を透り「全明^⑲」という大姉号まで授けられた。それに止まらず、「長い念願だった「無字」が通ってからも、わたくしは日本禅学堂の月並接心には欠かさず出かけました。そして、それは多分、明治四十四(一九二一年)年「青鞥」創刊の、少し後までもつづいたかとおもいます」と平塚らいてうは振り返っている(『自伝』①二九六頁)。

その後「南天棒老師は八十歳になられたとき、弟子の反対をしりぞけ、自分から遷化を発表し、西宮海清寺でその大会を行われました。それ以来上京もされず、参禅はもちろん受けられなくなりましたから、日本禅学堂は閉鎖され」と言う(『自伝』①二九六頁)。ところが、日本禅学堂の閉鎖と南天棒の「生き葬式」が一九一八年に当たるので、この記述の曖昧さを指摘しなければならない。平塚らいてうはこの坐禅会が解散されるまで参禅を続けたかのように述べているが、一九一一年以降七年間の隔たりがあって、その間日本禅学堂での定期的な接心にずっと参加していたとは考えにくい。なぜなら、一九一四年より奥村博^⑳(後に博史、一八九一―一九六四)との共同生活が始まり、翌年には長女の曙生^㉑が生まれたからである。

いずれにしても、平塚らいてうは一九〇五年に綱島梁川の文章を読んでから、南天棒の「許し」を受けるまでの四年間を非常に密度の高い時間として感じていたと思われる。この時期に彼女の人生が一変したと言っても過言ではな

い。一九一一年の九月に出された『青鞥』の創刊号は、短期間で体得された多くの気付きの結晶であると言えよう。これを機に彼女は「らいてう」というペンネームを選び、文筆活動が本格的に始まる。この頃に築き上げられた世界観が平塚らいてうの人生の基調をなしていることは、後の行動や岐路に立った時の選択に現れている。晩年まで、平塚らいてうが『自伝』のまとめ作業で疲れたとき「ちょっと坐りましょう」と言って坐禅によって「充電」していたことは編集者の小林登美枝（一九一六―二〇〇四）の記述からも明らかである（『自伝』②、二九七頁）。

三 出会った神道系の宗教とその課題

平塚らいてうが関わった他の宗教のうち、神道系の教えが特別な位置を占めていたようである。これは平塚らいてう自身よりも姉の信仰が中心なので、残念ながら手掛かりは少なく、むしろこの側面の追究を課題として紹介しておきたい。姉は早い時期から神道系の宗教に対して厚い信仰の持主だったことが知られている。『青鞥』創刊の頃を振り返る文脈で、平塚らいてうはなぜ自分の姉を誘わなかったかを考えて「夫の任地神戸に離れ住んで」いたことに加えて「天理教に夢中になっていた」との理由を挙げている（『自伝』①三七〇頁）。姉の信仰がどの理由で変わっていったのかは不明であるが、一九二六年頃夫が神戸の通信省に務めている間、大本教に落ち着いたようである。一九四二年四月に平塚らいてうが夫と共に茨城県に疎開したのは、姉の信仰が関係している。「姉は、東京は火の海となるという大本教の予言を信じ、以前から戸田井に家をつくって住み、母も疎開させ、妹にも来るようすすめていた」⁽²²⁾。しかし、以前から平塚らいてう自身もこの教えに関心を寄せている。例えば一九三二年に大本教の機関紙『人類愛善新聞』に談話を載せた際、出口王仁三郎（一八七二―一九四八）の『靈界物語』とスエーデンボルグの『天国と地獄』の類似にも触れていた⁽²³⁾。井手は「らいてうが大本教にもっとも接近した時期は一九三二、三三年であろうか」と推定している。戦

後には姉の信仰は大本教から派生した三五教⁽²⁴⁾になっており、母光沢の葬式もこの教の仕来りに従って行われた。しかし戦時中、特に大本教の第二弾庄が行われた一九三五年以降は平塚らいてうはこの教団への言及を控えている。結局、平塚らいてうが『神諭』や『靈界物語』を読んで、「ひたひたと胸に寄せるもののある事を否定は出来ません」と言っていたが、この感激が戦後どのように発展し、彼女の思想と繋がったかについてさらなる研究が不可欠である。

四 平塚らいてうの評価の特徴

これまで平塚らいてうが出会った主な宗教を駆け足で見えてきた。そのつどの感激と失望を含めた紆余曲折の中で、本人が常に求めつづけたことは既にある程度判明してきたと言えよう。ところが平塚らいてうの「評価」と言っても、それは出会った人の長短を論ずるような批評ではなく、自分の理想に適うかどうかという基準に照らし合わせた表現である。『自伝』には人を貶すような記述を避けて、主観的な印象や風貌の描写が多い。しかも、これらを解説すると、当時の宗教界に対するかなり厳しい評価が現れてくることも否めない。ただ、「宗教」を総合的に評価するより、あくまで縁があつて直接に関わった人に対する評価に限るという点に留意したい。

キリスト教に対する評価

たとえば、最初に接触したキリスト教（正確にはプロテスタント教）について、成瀬仁蔵に対する憧れが早くも崩れ、その言葉が「白々しい、冷たいものに」変わってしまったという先の発言は、敏感な平塚らいてうがこの授業の中に一種の「偽善」を感じとったことを示すと思われる。しかし彼女は成瀬の宗教的見解に飽きたとしても、後にまた網

島梁川の体験に魅了される。これは同じプロテスタント教の中で、哲学的な理解よりも神秘主義的なアプローチに親しみを覚えた証であろう。その延長線上に禅の瞑想という発見が起こるのはごく自然に思える。

禅に対する評価

平塚らいてうがより具体的な道を求めて臨済宗の修行法を身につけた経緯を見てきた。しかし、彼女がその伝統に親しみながら、適度の「距離」を保っていたことも明らかである。男尊女卑の激しい禅寺の世界に対する敬遠も考えられるが、むしろ伝統の縄張に束縛されたくない理想で生涯を貫いた結果であろう。この理想を解明するには、次の発言が役に立つ。

「わたしは、たまたま縁あって坐禅をやり、見性といわれる心的経験をjして、その境地に入りましたが、どんな道からでも極限に到達すればおなじであると信じていますから、読者から狭い意味に受けとられることを気づかって、禅という言葉を意識して使わないようにしていました」（『自伝』①、三六五頁）。

ここでいう「狭い意味に受けとられること」とは何を指しているのだろうか。文脈は有名な『青鞥』創刊号の文章「元始、女性性は実に太陽であった。真正の人であった。云々」に対する平塚らいてう自身の解説である。彼女の次の説明に続く文章である。

「ここにいう「太陽」——大円光体——は、いうまでもなく生命の根源の象徴であり、「隠れたる我が太陽を、潜めるわが天才を発現せよ」とは、各自がその自我の当体に到達することによって、失われた女性の生——創造力——の全的回復を求めたものであります」（『自伝』①、三六五頁）。

「生命の根源」という普遍なことが前提なので、平塚らいてうは「公案」などを含む狭義の「禅」、まして特定の教義に限られた理解で困ることを表明している。この反応は、体得した「自我の当体」があらゆる宗教のエッセンス

であると共に、教義や儀式などによって、かえって生まれながらの「太陽」が覆い隠されてしまうというパラドックスをも示唆している。

魅力とは何か

平塚らいてうが出会った師匠に関しては、円覚寺に滞在していたころ、函応宗海について「まるで魅力がない」という評価を見てきた。これが単なる個人的な「好み」の問題に過ぎないとすれば、これ以上何も言えない。しかし、平塚らいてうがすでに数人の老師に会っていた事実を考えた場合、この発言は決して男性の魅力を論じるものでなく、本性に目覚めたはずの人にどの程度の「輝き」があるのかを直感的に表した判断であろう。つまり、これがおそらく円覚寺派の流れの形骸化をほめかし、平塚らいてうが一番重視する「心的経験」の乏しさという含みを持つと思われる。教団に属していない者、しかも参禅を知っている者から発せられる無邪気な証言として、興味深い。

平塚らいてうが最後に指導を受けた南天棒でさえも彼女は決して甘んじた評価だけを下していない。

「いま、（……）偶々老師のことが心に浮かぶことがあっても、それはきびしい室内でのことや、公案のことなどではなく、（……）「もう一本」と晩酌を岡田病院の看護婦さんにねだっていた、いかにも好々爺然とした老師であるのもおかしいものだとおもいます」（『自伝』①二九七頁）。

この思い出はもちろん懐かしさや親しみを込めているので、批判ではない。しかし、建前の「厳しい老師」というイメージを相対化する一種の皮肉をも含めている。平塚らいてうは南天棒の指導を受けなくなった後も、絶えず精神的好奇心を持ちつづけていた。ところが『自伝』には、南天棒の「生き葬式」以降、禅家との接触に言及するところは見られない。これをどう理解すべきかについては、さまざまな推測が可能であろう。さきの大本教への関心を一つの要素として位置づけることができるが、必ずしもそれまで歩んできた道の否定を前提としない。むしろ、当時の禅

僧のほとんどがナシヨナリズムに傾倒していった要素も考えられる。ただしその場合、平塚らいてう自身が戦時中に、一九三八年を境として皇室礼賛に傾きはじめたことを忘れてはいけない。⁽²⁾この点が先学によってすでに明らかにされているため、平塚らいてうの戦時中の態度を深く検討しないが、ついでに本稿の狙いが平塚らいてうを称えることではないことだけを付け加えておきたい。

むすび

平塚らいてうの『自伝』から宗教関連の事項を拾い始めると限りがないが、そのような評価の断片によって、公の宗教家の伝記には載っていない別の姿を垣間見ることが出来る。このような伝記の相対化を他の在家の自伝に拡大することが出来るなら、従来の「堅い宗教史」と全く違う側面が現れてくる。同様の資料との照合作業はこれからの共同研究の重要課題として多くの発見の可能性を秘めている。

本稿で検討してきた平塚らいてうの評価を振り返ってみると、彼女が出会った様々な宗教的指導者に対して、その恩恵を認めながらも場合によって厳しい評価を与えていることが明らかになった。近代の宗教が激動の時期を通過する中で、在家の人がこれほどはっきり宗教を取捨できたこと自体が日本の宗教の一種の「近代化」を証明する事実でもある。一方、彼女の評価に比べれば現在の既成宗教に対する批判精神がほとんど見られないのは、関心が薄れた証だろうか。

平塚らいてうの宗教に対する評価が、単なる逸話ではないと断言できるのはなぜか。強い求道心に駆られて、彼女は納得するところまでそれぞれの道を追究しつづけたからだと思う。彼女には「どんな道からでも極限に到達すればおなじである」という確信があり、普遍的な宗教観を提唱するに到っている。もちろん平塚らいてうは宗教家ではな

いし、若いころの体験以外これに関する発言を控え、人生の後半にはむしろ社会事業、女性解放に献身した。しかし彼女の鋭い瞳には、明治・大正・昭和の日本の宗教界は意外と鮮明に映っている。

本稿で検討した平塚らいてうと宗教の接点は氷山の一角に過ぎないが、このテーマの重要さだけでも明確になったとすれば幸いである。平塚らいてうに「フェミニストの先駆者」というレッテルを貼って、その観点からしか彼女の生涯を見ないアプローチに限界が生じるのは論を待たない。さらに、彼女の宗教観を通して、宗教家だけが論じる宗教像の限界も益々明白に見えるのではないだろうか。

参考文献

和書

- 井手文子『平塚らいてう 近代と神秘』（新潮社、一九八七年）。
- 井上順孝等編『新宗教教団・人物事典』（弘文堂、一九九六年）。
- 今北洪川『禪海一瀾』（昌興蔵版、阿部肇輔出版、一八七六年）。
- 大濱徹也『明治の墓標 庶民のみた日清・日露戦争』（河出書房新社、一九九〇年）二〇〇三年に『庶民のみた日清・日露戦争』という書名で、刀水書房から再版。
- 鎌田 慧『反骨のジャーナリスト』（岩波書店、二〇〇二年）。
- 岸田絹夫『法脈、現代神匠列伝』（中外日報、一九七三年）。
- 古賀英彦編著、入矢義高監修『禪語辞典』（思文閣、一九九一年）。
- 佐々木英昭『新しい女』の到来 平塚らいてうと漱石（名古屋大学出版会、一九九四）。
- 末本文美士『近代日本の思想・再考―明治思想家論』（トランスビュー、二〇〇四年）。
- 鈴木大拙『今北洪川 激動期明治の高僧』（春秋社、一九九二年）。

大珠院直心会編、盛永宗興訳、鐔之原妙鈴訓註『禪海一瀾』(相樹社、一九八七年)。

『谷中・根津・千駄木』二五号(地域雑誌「千駄木山で生まれた女の雑誌 平塚らいてうと『青箱』」(一九九〇年の特集号)。

網島榮川「予が見神の實驗」『新人』雑誌(六ノ七、一九〇五年)で初出(後に『病間録』二〇八〜二一九頁に集録され、さらに筑摩書房発行の一九七三年版の『現代日本文学大系』九六にも掲載)。

——『病間録・病窓雜筆』(春秋社、一九二四年)。

中原節子『南天棒行脚録』秋月龍環選神書復刻シリーズ3(平河出版、一九八四年)。

——『南天棒神話』秋月龍環選神書復刻シリーズ5(平河出版、一九八五年)。

能仁見道訓読『訓読 近世神林僧宝伝 上下二巻』(神文化研究所、二〇〇二年)。

平塚らいてう『元始』女性は太陽であった『四冊』(大月書店、国民文庫、一九九二年)。

——『平塚らいてう著作集』八冊(大月書店、一九八三〜八四年)。

星 悠雲「巻頭言『草枕』と『陸前大梅寺』」『税大通信』(一九九三年)四七頁。

堀場清子編『『青箱』 女性解放論集』(岩波書店、一九九一年)。

村上專精『佛教一貫論』(哲學書院、一九八〇年)。

——『日本仏教の女子に対する態度の變遷』(一九〇四年、順道書院)。

——『女子教育管見』(金港堂書籍、一九〇五年)。

——『新編 佛教統一論』(読群書類従完成会、一九九七年)。

モール・ミシェル「南天棒とその思想展開」『近代仏教』七号、二〇〇三年三月、五〇〜六九頁。

米田佐代子・池田恵美子編『『青箱』を学ぶ人のために』(世界思想社、一九九九年)。

米田佐代子「平塚らいてう 近代日本のデモクラシーとジェンダー」(吉川弘文館、二〇〇二年)。

らいてう研究会編『『青箱』 人物事典』(大修館書店、二〇〇一年)。

洋書

Bardsley, Janice Bridges. *Writing for the New Woman of Taishō Japan: Hiratsuka Kachō and the Seito Journal*. Ph. D. dissertation, University of California, Los Angeles, 1989.

Bernstein, Gail Lee, ed. *Recreating Japanese Women, 1600-1945*. Berkeley: University of California Press, 1991.

Huffman, James L. *Creating a Public: People and Press in Meiji Japan*. Honolulu, Hawaii: University of Hawaii Press, 1997.

Lowy, Dina B. *The Japanese "New Woman": Contesting Images of Gender and Modernity, 1910-1920*. Ph. D. dissertation, Graduate Program in History, State University of New Jersey, New Brunswick, NJ, 2000.

Rimer, J. Thomas, and Joint Committee on Japanese Studies, ed. *Culture and Identity: Japanese Intellectuals during the Inter-war Years*. Princeton, NJ: Princeton University Press, 1990.

Sasaki, Shigetsu. *Buddhist Society of America, and First Zen Institute of America. Carl's Yawn: A Zen Miscellany*. New York: First Zen Institute of America, 1947.

Sawada, Janine Tasca. *Practical Pursuits: Religion, Politics, and Personal Cultivation in Nineteenth-century Japan*. Honolulu: University of Hawaii Press, 2004.

注

(1) 本稿は二〇〇四年五月二二日に淑徳大学で開催された日本近代仏教史研究会の研究大会での発表原稿に基づいている。なお、「南天棒とその思想展開」では平塚らいてうによる南天棒への言及、そして外部資料としての彼女の文章の価値に触れた(『南天棒とその思想展開』『近代仏教』七号、二〇〇〇年三月、五四頁)。この意味では、旧稿の延長でもある。さらに「欧米新刊雑誌」では「らいてう」研究は依然としてフェミニスト、社会学、文学の観点からしか注目されていない」ことを嘆いていた(『近代仏教』一〇号、二〇〇三年五月、一三五頁)。本稿では自分の発言に対する責任の一部を取るようになる。

(2) 平塚明が本名で、高山の「雷鳥」という鳥にちなんで「らいてう」を筆名として選んだ理由は「元始」、女性には太陽であった平塚らいてう自伝『国民文庫本第一冊、三七四〜五頁に詳しく説明されている(大月書店、一九九二年)。以下はこの書名を「自伝」と略して、四冊のうちの巻数を「①」などで表す。

※国民文庫本のページ番号が他の版と異なっているのに注意。なお、本稿では幼少時代を除いて彼女の名前を「平塚らいてう」に統一して用いた。「らいてう」だけで読みづらいからである。

(3) 米田佐代子は「平塚らいてう 近代日本のデモクラシーとジェンダー」の第一章でまさに「父の近代」との葛藤を詳しく分析し

ている。

- (4) 定二郎の生没年に関して井手文子『平塚らいてう 近代と神秘』(二〇と二五九頁)と米田佐代子『前掲書』(二二〇頁)に従った。
- (5) 『自伝』①一〇〇頁。
- (6) 母の生没年に関しては、逝去したのは一九五四年である。その時九一歳になっていたことから単純な計算をするとい八六三年に生まれたことになるが、生まれた月によって一年の差があるかも知れない。没年は米田佐代子『前掲書』二四六頁、注二七にあり、その時の年齢について井手文子『前掲書』二七一頁に記述がある。
- (7) 姉の生没年に関して同じく井手文子『前掲書』(二二七頁)に従った。
- (8) 米田佐代子『前掲書』一〇頁。
- (9) Sawada 二頁。
- (10) 村上專精『新編 佛教統一論』一七四頁。末本文美士『近代日本の思想・再考 I 明治思想家論』一〇〇―一〇九頁参照。
- (11) 村上專精『新編 佛教統一論』中の「略歴」、九頁。
- (12) らいてう研究会編『青箱 人物事典』八七頁参照。
- (13) 洪川宗温の俗姓は今北で、室号として蒼龍窟または虚舟子を用いた。臨済宗の僧侶として知られているが、儒学と仏教の調和を唱えると同時にキリスト教を痛烈に批判しつづけた。たとえば聖書の創世説を「愚説妄言」と位置づけていた(鈴木大拙『今北洪川 激動期明治の高僧』一〇〇頁。孫弟子に当たる鈴木大拙(一八七〇―一九六〇)でさえ、「老師は当時の多くの仏教者のように神道的イデオロギーをそのままに無批判的に鵜呑みにせられていた」と述べている(前掲書、一一〇頁)。
- (14) 原文は漢文で「大道求于心。勿求于外。我心妙之妙用。直我大道也」となっており、訓読すれば「大道、心に求めよ、外に求むること勿れ。我が心体の妙用、直に我が大道なり」となる。今北洪川『禪海一瀾』(昌興蔵版、阿部準輔出版、一八七六年)編述列言二下裏。大珠院直心会編、盛永宗興訳、銚之原妙鈴訓註『禪海一瀾』(柏樹社、一九八七年)二九頁。「直」の訓読に関しては、原文には送り仮名はないが柏樹社の本と平塚らいてうはこれを「ただちに」と読んでいる。しかし、この文脈では「まさに」という意味なので、仏教用語として「じきに」と読んだ方が正しい。「直」が唐・五代の俗語であり、たとえば「直是」を「まさに」と読んでいる(古賀英彦『禅語辞典』一八三頁)。

- (15) 輟翁宗活(俗姓は釋、室号は兩忘庵)に関する資料は案外少ない。わずかに能仁覺道訓読『訓読 近世禅林僧宝伝』(下巻、三八七頁)と岸田絹夫『法脈 現代禅匠列伝』(二二頁)から基本的な情報が見られる程度である。弟子の宗岑指月(俗姓は佐々木、室号は曹溪庵、一八八二―一九四五)が編集した英文雑誌もある。Sasaki Shigetzu, *Ca's Yawn: A Zen Miscellany*.
- (16) ここでいう「参禅」は師匠との面会を意味している。つまり、弟子たちは順番で老師の部屋に入り、与えられた公案に対する「見解」を表すやり方である。

- (17) 宗詮眞淨(俗姓は小幡、のち坂上、室号は潜龍室または荊棘室)について拙稿「南天棒とその思想展開」にも言及した(注29、六九頁)が、宗詮が字となった理由から名前を眞淨宗詮でなく宗詮眞淨と書くべきである。略伝は能仁『前掲書』(下巻、三〇八頁)と岸田絹夫『前掲書』にある(九五―一〇二頁)。

- (18) 中原秀嶽は海禅寺一九世に当たる。幼名は永井雄次郎で、仙台燕沢の善應寺の第二〇世永井禪進の子として生まれ、後に仙台の大梅寺の住職だった鄧州全忠南天棒(俗姓は中原、一八三九―一九三五)の養子となった。しかし、大梅寺から出奔し、円覚寺に走ってから洪嶽宗演(俗姓は釋、一八六〇―一九一九)の弟子となる複雑な経歴がある。海禅寺の過去帳に拠ると、秀嶽は一九二七年五月五日に没して、その頃五六歳ぐらいだったようである。この情報は海禅寺の御住職、後藤栄山和尚から提供していただいた。なお、星智雄和尚は星悠雲の名前で出した「巻頭言」「草枕」と「陸前大梅寺」があり、秀嶽の出奔事件について南天棒が宗演に当てた手紙を紹介している。『自伝』には秀嶽が宗演の印可まで受けたとある(①三三三頁)。この記述に根拠があったとすれば平塚らいてうとの恋愛事件によって法嗣の資格が抹消されたとは思えない。

- (19) 函應宗海(俗姓は宮路、室号は蹈頂窟)に関して、『自伝』にある俗姓「宮地」は「宮路」の誤植である(二七四頁)。この僧侶は円覚寺二〇世となり、一九〇五年から一九一〇年までの間管長を務めた。略伝は能仁『前掲書』(下巻、四四―四五頁)にある。

- (20) 「全明」は南天棒の諱(法諱とも)「全忠」の「全」と平塚らいてうの本名「明」との組合せである。この名前の授与は弟子として認められたことを意味するが、南天棒の自伝には平塚らいてうに関する言及は見当たらない。これを女性に対する偏見の現れと見るべきか、または編集者の選択と見るべきかは定めないが、在家の人を重んじたはずの南天棒の系統としては理解しにくい沈黙である。なお、『自伝』でいう「老師の道号の全の一字をいただいた」という記述は誤りである(①二四四

頁。正確には「鄧州」が字で、道号に該当する。能仁『前掲書』下巻、四五六頁参照。

(21) 南天樺の「生き葬式」は海清寺開山の無因宗因（二三六～一四一〇）の五〇〇年の遠忌に合わせて、一九一八年四月四日に行われた。一九一〇年以降に延期された理由とその様子について中原鄧州の『南天樺行脚録』が詳しい（三九八～四〇八頁）。

(22) 井手文子『前掲書』二六一頁。

(23) 井手文子『前掲書』二四九頁。

(24) 井手文子『前掲書』二四八頁。

(25) 米田佐代子『前掲書』二四六頁、注二七。中野與之助によって創立された教の概要について、井上順孝等編『新宗教教団・人物事典』九～一〇頁参照。

(26) 一九三二年八月の『人類愛善新聞』、井手文子『前掲書』二四九頁による。

(27) 井手文子『前掲書』二五二～二六一頁と米田佐代子『前掲書』二二六～二三〇頁参照。

近代仏教

第 12 号

2006年 2 月

<追 悼>

吉田久一先生のご逝去を悼む 長谷川匡俊 (i)

<論 文>

明治初年寺院明細帳の数量的分析 圭室 文雄 (1)

平塚らいてうが見た近代の宗教とその評価
..... モール・ミシェル (20)

世紀転換期における仏教者の社会観

——『新仏教』における鈴木大拙と

井上秀天の言説を中心に—— 守屋 友江 (39)

近代日本における戦死者祭祀

——彰義隊士の埋葬をめぐる——

..... 今井 昭彦 (58)

<新刊紹介>

明治思想家論——近代日本の思想・再考 I / 近代日本と

仏教——近代日本の思想・再考 II

..... 大谷栄一・林 淳 (75)

近世の念仏聖無能と民衆 佐賀枝夏文 (80)

<彙 報> (84)

欧米新刊雑誌 モール・ミシェル (88)

KINDAI BUKKYŌ

Modern Buddhism

No. 12

Obituary

Mourning the Demise of Professor Yoshida Kyūichi

..... HASEGAWA Masatoshi (i)

Articles

Quantitative Analysis of Detailed Temple Registers in the

First Year of Meiji..... TAMAMURO Fumio (1)

Modern Religions as Hiratsuka Raichō Saw and Evaluated Them

..... Michel MOHR (20)

Two Buddhist Views of Society at the Turn of the Twentieth Century:

The Discourse of Suzuki Daisetsu and Inoue Shūten in the

Journal *Shinbukkō*..... MORIYA Tomoe (39)

The Enshrinement of War Dead in Modern Japan:

The Burial of Soldiers Who Participated in the

Ueno Rebellion (*Shōgitai* "The Justice-Exposing Squad")

..... IMAI Akihiko (58)

New Publications..... (75)

Announcements (84)

Notes Concerning New Publications in Western Languages..... Michel MOHR (88)

2006

Society for the Study of Modern Japanese Buddhist History
Tokyo, Japan

日本近代仏教史研究会